

■ ■ ■ その他鳥の話（八話） ■ ■ ■ = = = ⇒三州横山話より

■ ■ ■ ニオイ鳥 ■ ■ ■

ニオイ鳥が病人のある家の中にはさんで鳴き交わすと、その病人は助からぬと言います。鳴く声がちょうど病人の呻吟するように聞こえるのでつけた名と言いますが、呻吟することを、ニオウと言います。

日の暮れ方か明け方日の出前に、谷間の木立や、山の窪のようなところで鳴きました。眼の前に瀕死の病人が呻いているかと思うほどで、淋しいものでした。姿を見たものはないと言います。

■ ■ ■ ウイ鳥 ■ ■ ■

これも夏の明け方に、ニオイ鳥と同じような場所で鳴く鳥で、スーッ、スーッというような声で鳴きました。川を隔てた遠くの山などで鳴くのが、朝の静かな中で淋しく響きました。この鳥とニオイ鳥が鳴き交わすと、やはり人が死ぬと言いました。

■ ■ ■ 仏法僧の鳴き声 ■ ■ ■

仏法僧は、鳳来寺山にも棲むと言いますが、オスはブッポウと鳴き、雌は、ソウと鳴くと言います。私が聞いた声は、単にホウホウと言うように聞こえました。その後北山御料林で、夜鳴いていた鳥が、同じ鳴き音と思ったので、居合わせた滝川村の山田広造という人に訊きますと、鳩ほどの大きさの鳥で、目のまわりに黄色い羽毛のある鳥だと言いました。

■ ■ ■ 雨を降らせる水恋鳥 ■ ■ ■

水恋鳥が鳴けば雨が降ると言います。夏の初め、呼子の笛を吹くような声で鳴きます。水恋鳥は前世は女であって、家の人たちが仕事に出た留守を預かっていて、馬に水を与えることを怠ったために、その罰で鳥に生まれて来たと言います。水を飲もうとして川へ行くと体が赤いところから、それが水に映って、火に見えるので飲むことが出来ないで、空に向かって鳴いて雨を喚ぶと言います。雨が降ればその滴で喉を潤しているのだと言います。

■ ■ ■ ショウビン^{かわせみ}(翡翠)の巢 ■ ■ ■

ショウビンの巢は川に沿った崖などに横に穴を造ってあると言いますが、巢のまわりに、ナメクジの這った跡が幾重にもついていると言います。それは蛇を防ぐためだと言いますが、どうしてナメクジをつれて来るか、そのことは聞きません。

■ 弟を疑った杜鵑ほととぎす ■

杜鵑は、カッチャン、カケタカと言って鳴くと言いますが、また弟恋しやと鳴くとも言います。それについて、こんな話があります。

杜鵑は、昔、盲目で、弟と二人暮らしであったそうですが、家が貧しくて、ろくにうまいものも食べられないので、あるとき、弟が山へ行って山芋（自然薯）を掘って来て、自分は皮や固いまずいところばかり食べて、兄の杜鵑には、柔らかでうまいところを選んで食べさせると、兄の杜鵑はその味のいいのに驚いて、盲目の兄にくれたところがこんなにうまいのでは、眼の見える弟の食べたところは、どんなにうまかろうと、独り言を言って、目の見えぬことを嘆いたので、弟がそれを聞いて口惜しく思って、兄さんは眼が見えないので、特別にうまいところを差し上げたけれど、それほど疑うならば、私の食べたのを腹を断ち割って見せてあげたいと言うと、杜鵑は、すぐ弟の腹を断って、だんだん腹の中を探って行くと、眼の見えぬ杜鵑にも判るほど、ごつごつした味もないようなところばかり食べていたのに、初めて弟を疑って殺してしまったのを後悔して、気も狂おしくなって、弟恋しやと叫びながら、家を迷い出でて鳴くのだと言います。

■ 鶺鴒せきれいのこと ■

鶺鴒はゴシンドリと呼んで、庚申のお使い鳥だと言います。それ故この鳥を殺せば神罰があると言います。

■ 種々な鳥の鳴き声 ■

頬白は、テントニシュマケタ、シンシロイチャ二十八日と鳴くと言います。燕は、トキワの国では、芋食って豆食って、ベーチャクチャ、クーチャクチャと鳴くと言います。

梟は、ゴロスケと呼んでいて、ゴロスケホーコ、去年も奉公、今年も奉公と鳴くなどと言います。

早川種次郎という男が、子供のころ、首ツチョという罫を裏の山へかけた時、それにかかった鳩の形した鳥は、猫と少しも違わぬ鳴き声を立てていたと言いました。